[論文]

ホセ・マルティ研究の現状と課題

川上恵江

Studies on José Martí in Japan

Satoe KAWAKAMI

要旨

José Martí, 1853-95, apostle of the Cuban independence, has lately attracted attention after one hundred fifty years, not only in Latin America, but also in many other countries. A project of publication of the critical edition of Marti's works is in process and international conferences are held on the occasion of anniversary of his birth and his death in Cuba, but not so many studies can be seen in Japan. Even publication of Japanese translation of selection of his works in three volumes was suspended after two volumes have been issued. In this short essay, I survey the current situation of studies on José Martí in Japan, and point out the problem in it from a point of view of the history of social thoughts.

キーワード：ホセ・マルティ、研究史、キューバ、独立戦争。

1、はじめに

誕生から150年以上を経過した今日においてなお、その現代的意義が注目される「キューバ独立の使徒」ホセ・マルティ（José Martí, 1853-95）の思想については、ラテンアメリカ世界はもちろんのこと、さらなる国際的広がりをもって学術研究がおこなわれている。本国キューバでは校訂版著作集[1]の刊行も進行しており、生誕、没後を記念する国際シンポジウムも相次いで開催されている。

日本では、1998年に詩、小説、文芸評論を収録した『ホセ・マルティ選集』[2]第1巻、文学編（2）［以下、丸括弧は文献目録番号をあらわす］が出版され、翌年にキューバ革命関連の講演、書簡、論説などを収録した『ホセ・マ

ルティ選集』第3巻、運動編（3）が出版された。さらに生誕150周年にあたる2003年11月6・7日には、京都で「キューバ独立の使徒ホセ・マルティ生誕150周年シンポジウム」が開催され、雑誌でも記念特集[3]が組まれた。しかし、『選集』の出版は第2巻の思想編を欠いたまま中断しており、専門的な研究もそれほど活況を呈しているとはいえない。本稿は、日本におけるホセ・マルティ研究の歴史を概観するとともに、社会思想史を専門領域とする立場から今後の研究課題を提示しようとするものである。

2、原典の翻訳

日本でホセ・マルティの名前が知られるようになったのは、1959年のキューバ革命以降のことであり、彼の著作集『キューバ革命思想の基礎』[4]（1）の刊行は、8年後の1967年を待たなければならない。日本における最初の翻訳書である同書は3部構成になっており、それぞれ、第1部「キューバ革命党の理念」、第2部「われらのアメリカと彼らのアメリカ」、第3部「世界の先駆者たち」とタイトルが付されている。第1部は、1882年のマクシモ・ゴメス将軍への手紙につづき、92年から95年に絶筆するまでのキューバ革命に関する論説、書簡などを収録している。第2部は、「われらのアメリカ」をはじめ、いわゆる「2つのアメリカ」の見解を明確に示した80年代後半から90年代の論稿を、第3部は、人民解放の先駆者たちにかんする論評をそれぞれ収録している。かなり以前に翻訳・出版された文献であるが、「われらのアメリカ」をはじめ、最近の『ホセ・マルティ選集』には収録されていない論稿や書簡を16点[5]含んでおり、また、各章に簡単な解説が付されているので、きわめて難解なマルティの文章を理解するさいの一助になるといえよう。

しかし、「はじめに」(12) でも述べられているように、同書は、詩、小説、演劇からジャーナリスティックな時事評論、経済問題、政治問題、社会問題、労働問題、文化芸術の問題におよぶきわめて広範な著作を収めた28巻全集（最終巻は索引）のなかから、かれの活動の「最後の時期、すなわち、キューバ革命党の創立と、1895〜98年のキューバ独立戦争の初期」[6] のものを中心に編集されており、文学や芸術関連の著作は若干の評論の紹介のみにとどまっている。このことは、すでに「モデルニスモ（近代主義）の創始者」として

知られていたマルティの著作集としては、あまりに政治的著作に偏重していることを意味し、その点において、「ひじょうに不充分なもの」[7] といえよう。

それにたいし、1998年に出版された『ホセ・マルティ選集』第1巻（2）は、「イスマエリーリョ」、「素朴な詩」の2点の詩と、戯曲「祖国と自由」、小説「ルシーア・ヘレス」(抜粋)、キューバの小学校の教科書にも必ず登場する子供向け物語『黄金時代』、文芸評論など、「ホセ・マルティの文学的側面を紹介する」[8] 構成になっている。翌年に出版された『ホセ・マルティ選集』第3巻（3）は「キューバ独立の父」を基軸に構成されており、「追放地のスペインを密かに脱出し米国に到着してからキューバ独立戦争で斃れるまでの作品」[9] 、すなわち1880年から1895年までの著作37点を収録している。「運動編」としての性格上、9点の著作が『キューバ革命思想の基礎』（1）と重なっているが、マルティの思想を「より総合的に把握できるよう」[10] な編成となっている。著作ごとに付けられた訳注や解説も充実しており、マルティ研究の進展をうかがわせる質の高いアンソロジーであるが、すでにふれたように、「マルティ思想の成熟期にあたる米国亡命時代の評論、論文、講演等を中心に構成した」[11] 第2巻を欠いていることが、思想分野での研究の広がりを阻む一因となっている。

以上見てきたように、日本語で読めるマルティの著作はきわめて少なく、「『キューバの使徒』、革命家、民族英雄であっただけでなく、政治家、外交官、ジャーナリスト、文学者、詩人、作家、思想家でもあった」[12] マルティの思想像を知るにはとても十分であるとはいえない。日本におけるマルティ研究の広がりと深まりのためには、さらなる著作の出版が待たれる。

3、伝記的研究

最初の著作集の「はじめに」(12) は、ホセ・マルティの略伝と、ソ連の研究者ウェ・エス・ストルボフの伝記的研究が提起する4つの時期区分を紹介している。マルティのジャーナリズム活動と創作活動にみられる社会政治思想の発展段階という観点から分類した同研究によれば、第1期は1868〜74年、投獄と追放の青年時代、第2期は1874〜82年のメキシコ、グアテマラ、キューバ、アメリカ合衆国滞在時代、第3期は1880年代のニューヨークでの

文筆活動時代、第４期は1880年代末からのキューバ革命党建設時代と区分される。

それにたいし神代修（８）は、マルティの生涯を７つの時期に区分している。それによれば、第１期は1853～70年の幼年時代、第２期は1871～74年のスペイン時代、第３期は1875～78年のメキシコ、グアテマラ時代、第４期は1878～79年の帰国、スペイン時代、第５期は1880年～81年のニューヨーク、ベネズエラ時代、第６期は1881～95年のニューヨーク亡命時代、第７期は1895年１月20日～５月19日の帰国から戦死までと区分され、ストルボフのものとはまったく異なる構成になっている。その根拠については言及されていないが、アルメンドロスの伝記[13]（４）の展開とも共通するものとなっている。また、後藤（10）もマルティの略歴紹介のなかで、時期区分と明言してはいないが、ほぼ同様の区分をおこなっている。ただしここでは、第３期と第４期、および、第６期と第７期が結合されている。

いずれにしてもこうした時期区分は、マルティの諸著作における内的論理展開の分析にもとづいて厳密におこなわれる必要があろう。また、上述の伝記（４）のオリジナルテキストは1965年に出版されたものであり、その後の研究の進歩を反映した伝記の出版も待たれるところである。

４、テーマ別研究

はじめの選集ではほとんど取り上げられなかったモデルニスモの創始者としての側面にいち早く注目した研究が柴崎（11）である。同稿は、「イスパニア黄金世紀の古典作家」に学んでつくりあげた独自な文体によるマルティの散文が、「文体による文学の新しい可能性の発見」を意図するものであったことを指摘し[14]、詩的言語の創造によって「人間精神の可能性を模索し、良きにつけ悪しきにつけ、人間の存在を問う現代文学への第一歩」[15] となったモデルニスモを創始した詩人、マルティの姿を描きだそうとする。

2003年の生誕150周年シンポジウムでも報告した神代修もまた、詩人としての側面に注目する。神代（９）は、「マルティの詩を論ずる場合、彼の行動とくに革命家・政治家としてのそれに言及する必要がある」[16] として、詩と政治との関連づけとともに、マルティ自身をとりまく諸状況とのかかわり

で論ずることの必要性を主張する。こうした観点から同稿は、革命的ロマン主義からモデルニスモへと変容を遂げていく過程を素描したのち、『可愛いイシマエル』（イスマエリーリョ）、『自由詩』、『黄金時代』、『素朴な詩』について論じている。多面的な活動をおこなった思想家を評価する際に、欠かすことのできない視点を提起したものといえよう。

キューバの詩人、運動家、思想家としてではなく、ラテンアメリカのジャーナリストとしてホセ・マルティを描きだそうとするのは柳原（14）である。同稿によればマルティは、「帝国主義的膨張を続けるアメリカ合衆国がその膨張を正当化する手段として持ち出したパンアメリカ主義に対する対抗言語」[17] とみなしうる「ラテンアメリカ主義を披瀝し、文化概念の産出装置としての記事を書いた」[18] 知識人として位置づけられる。

山田（15）は、ラテンアメリカ主義の集大成である「われらのアメリカ」における「インディオ」のテーマの位置づけと、メキシコ滞在期に獲得した彼らに対する視点の関連性を論じたものであり、マルティが「インディオ」の国家統合を問題としていたことを明らかにしている。

マルティに関するモノグラムはこのようにそれほど多くないが、時代状況のなかでマルティを位置づけようとするのが近年の傾向であり、テーマも複数の学問領域にまたがる横断的なものとなっているといえよう。しかし、ここで明らかになるのは、一般化しているイメージに反して政治活動家としての側面があまり取り上げられておらず、さらに、哲学・思想的側面にアプローチした研究が出遅れていることである。決定的な問題は、アンソロジーであれ、単著であれ、また翻訳書であれ、ホセ・マルティについてのまとまった研究書がいまだ存在しないことである。一定の量がなければ質への転化も起こらない。多様な活動をおこなった思想家への多面的な研究が求められている。

5、おわりに

以上、日本におけるマルティ研究を概観してきたが、最後にマルティの評価と現代的意義についての見解を見ておこう。神代（8）は、マルティを「キューバとラテンアメリカの解放を訴えただけでなく、『北方の巨人』すな

わち米国が将来カリブ海地域とラテンアメリカ、さらには『第三世界』を中心とする世界各地に対する脅威となることを、早くも19世紀末に予測」[19] した「第三世界の先覚者」[20] と位置づけ、「19世紀末に『第三世界』の視座から世界全体を見つめた偉大な人物」[21] として評価する。

一方、後藤（10）は「マルティ思想の機軸は『人間の自由』にある」[22] と見て、自由に最大の価値をおき、「慈愛」（bondad）によって律せられた自由の実現とそれが可能な社会を希求したマルティを、「19世紀の自由主義思想の『よき部分』の体現者」[23] と位置づけ、そこに今日的な示唆を読み取ろうとしている。

このように豊かな可能性を秘めたマルティ思想の今日的意義を評価するには、彼の多様な活動を統一する内的論理を捉え、思想の全容を解明して、同時代の社会的・歴史的状況のなかに位置づけることが必要であろう。また、ラテンアメリカの思想についての思想史的研究は、ヨーロッパ宗主国中心の社会思想史研究にも新たな生産的視点を与えるものとなるであろう。

［ホセ・マルティ関連文献目録（日本語）］

1、著作の翻訳

（1）『キューバ革命思想の基礎　反帝国主義的精神の形成』神代修訳、理論社、1967年。

（2）『ホセ・マルティ選集』第1巻、牛島信明、青木康征、井尻直志、内田兆史、大楠栄三、佐藤邦彦、花方寿行、柳原孝敦訳、日本経済評論社、1998年。

（3）『ホセ・マルティ選集』第3巻、後藤政子監修、青木康征、後藤雄介、柳沼孝一郎訳、日本経済評論社、1999年。

2、伝記

（4）エルミニオ・アルメンドロス『椰子より高く正義をかかげよ／ホセ・マルティの思想と生涯』神尾朱美訳、海風書房、1996年。

3、研究文献

（5）上野清士「現代に歌い継がれるホセ・マルティ」『潮』第493号、2000円3月。

（6）牛島信明「解説」、『ホセ・マルティ選集』第1巻、牛島信明、青木康征、井尻直志、内田兆史、大楠栄三、佐藤邦彦、花方寿行、柳原孝敦訳、日本経済評論社、1998年。

（7）神代修「ホセ・マルティの思想と行動」『人文学』（同志社大学人文学会）第82号、1965年9月。

（8）同、「解説・『キューバの使徒』ホセ・マルティ」、エルミニオ・アルメンドロス『椰子より高く正義をかかげよ／ホセ・マルティの思想と生涯』神尾朱美訳、海風書房、1996年。

（9）同、「詩人ホセ・マルティの軌跡—文学と政治のはざまで—」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』（京都外国語大学ラテンアメリカ研究所）第3号、2003年12月。

(10) 後藤政子「解説—ホセ・マルティ選集第3巻の刊行にあたって」、『ホセ・マルティ選集』第3巻、後藤政子監修、青木康征、後藤雄介、柳沼孝一郎訳、日本経済評論社、1999年。

(11) 柴崎忠房「ホセ・マルティとモデルニスモ（近代主義）」『京都産業大学論集』（外国語と文化系列）第2巻（3）、1973年2月。

(12) 高橋勝之「はじめに／ホセ・マルティの生涯とその著述」、ホセ・マルティ『キューバ革命思想の基礎　反帝国主義的精神の形成』神代修訳、理論社、1967年。

(13) 同、「あとがき」同上書。

(14) 柳原孝敦「街灯、吊り橋、鉄塔—ホセ・マルティ、文化の生産装置—」『法政大学多摩論集』（法政大学経済学部）第16号、2000年3月。

(15) 山田泰子「ホセ・マルティの『われらのアメリカ』におけるインディオのテーマ：メキシコ滞在期に関する一考察」『六甲台論集』国際協力研究編（神戸大学大学院国際協力研究会）第2号、2001年12月。

(16) ペドロ・パブロ・ロドリーゲス「—日本語版への序文—世界的な人物ホセ・マルティ」、エルミニオ・アルメンドロス『椰子より高く正義を

かかげよ／ホセ・マルティの思想と生涯』神尾朱美訳、海風書房、1996年。

(17) シンティオ・ヴィティエール／池田大作「新連載対談（1）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る―『迫害と人生』千年先を見つめる眼光」『潮』第484号、1999年6月。

(18) 同、「連載対談（2）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る『師弟』―限りなき向上の軌道」『潮』第485号、1999年7月。

(19) 同、「連載対談（3）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る　家族―その人間愛を世界に広げて」『潮』第486号、1999年8月。

(20) 同、「連載対談（4）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る「間断なき前進」―言論による精神闘争」『潮』第487号、1999年9月。

(21) 同、「連載対談（5）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る」『潮』第488号、1999年10月。

(22) 同、「連載対談（6）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る『民衆と共に』無限の活力への信頼」『潮』第489号、1999年11月。

(23) 同、「連載対談（7）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る『民衆の教師』対話と行動の戦人（いくさびと）」『潮』第490号、1999年12月。

(24) 同、「連載対談（8）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る『リーダーシップ』―先覚者の苦悩と決断」『潮』第491号、2000年1月。

(25) 同、「連載対談（9）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る『21世紀の国家観』人類こそわが祖国」『潮』第492号、2000年2月。

(26) 同、「連載対談（10）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る『心の詩』―人間と宇宙の交響」『潮』第493号、2000年3月。

(27) 同、「連載対談（11　最終回）『キューバの使徒ホセ・マルティ』を語る人道の闘士―永遠なる魂の獅子吼」『潮』第494号、2000年4月。

(28) 同、『カリブの太陽　正義の詩―「キューバの使徒　ホセ・マルティ」を語る』潮出版社、2001年。

註

1　José Martí, *Obras Completas. Edición Crítica,* Centro de Estudios Martianos.

2　同書は、José Martí, *Obras Ecogidas* en tres tomos, Centro de Estudios Martianos, 1978-81. からの抜粋・翻訳である。

3　『京都ラテンアメリカ研究所紀要』（京都外国語大学ラテンアメリカ研究所）第３号、2003年12月、１～72ページ。

4　同書は、1963年より刊行が開始され1966年に完成された28巻全集（最終巻は索引）、*Obras Completas de Martí,* Editorial Nacional de Cubaに基本的には依拠しつつ、「２、３の文章は」大衆普及版の25巻全集、*Obras Completas de José Martí,* Editorial Tierra Nueva, 1961.によるものである。なお、上記の28巻全集は1975年に第２版が出版されており、さらに、索引をのぞいた27巻については2002年にCD-ROM版が作成されている。CD-ROM版の第１～第５巻と『黄金時代』は校訂版となっている。

5　「臨終」、「個人と祖国」、「革命党創立記念日集会」、「ゴンサロ・デ・ケサダへの手紙」（1895年４月１日）、「われらのアメリカ」、「併合主義に反対して」、「合衆国の宗教」「米州会議に反対する手紙３つ―ゴンサロ・デ・ケサダへ」（1889年10月29日）、「同―セラフィン・ベリョに」（1889年11月16日）、「同―ゴンサロ・デ・ケサダへ」（1889年12月14日）、「セスペデスとアグラモンテ」、「フアレス記念日」、「サン・マルティーン」、「シモン・ボリーバル」、「カール・マルクス」、「プーシキン」。

6　高橋（12）10ページ。

7　同（13）353ページ。

8　牛島（６）448ページ。

9　後藤（10）385ページ。

10　同（10）385ページ。

11　同（10）385ページ。

12　神代（８）220ページ。

13　Herminio Almendros, *Nuestro Martí,* Instituto Cubano del Libro, 1965.

14　柴崎（11）109ページ。

15　同（11）127ページ。

16　神代（９）54ページ。

17　柳原（14）96ページ。

18　同（14）98ページ。

19　神代（８）201ページ。

20　同（８）201ページ。

21　神代（８）204ページ。

22　後藤（10）399ページ。

23　同（10）384ページ。